

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Reexamination of the Nomadic Society : Nomad people in process of settling down : observation in Xinjian, China

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梅村, 坦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00003534">https://doi.org/10.15021/00003534</a>

# 遊牧民と定居社会

—新疆の事例を中心に—

梅 村 坦\*

1. はじめに	8月16日
2. 新疆における遊牧民の観察例	2-e. サイラム湖周辺 (ボルタラ-モンゴル自治州: 山岳上の湖) [地図3] 1987年7月11-12日
2-a. ジャス-カラガイ草原 (アルタイ地区: 山岳中) [地図2] 1989年8月14日	2-f. テギルメティ村 (キジルスゥーキルギズ自治州: 平原のはずれ) [地図4] 1987年10月25-26日
2-b. アルタイ市近郊の草原 (アルタイ地区: 山中の小平原) [地図2] 1989年8月14日	2-g. 小カラクリ湖近辺 (キジルスゥーキルギズ自治州: ムズターグ-アタ峰周辺) [地図5] 1989年9月14-16日
2-c. シェミルシェク村 (アルタイ地区: 山裾) [地図2] 1989年8月13日	
2-d. ウルングル湖南辺 (アルタイ地区: ジュンガル盆地) [地図2] 1989年	3. むすびにかえて

## 1. はじめに

ユーラシア世界は、定着農耕（オアシス）と遊牧という異なった二つの生業形態要素から形成されてきたとみることができる。それに加えて統治・軍事の拠点であり、また商業経済・交易活動の結節点である都市の存在が、ユーラシアの歴史と現在を立体的に構築してきたと考えることができるだろう。このうち都市・農村についての情報は歴史的にみて多くの文献から明らかにされることが多く、またその現状についての調査も比較的容易におこなわれやすい。筆者としては（梅村 1985: 5-11; 1986: 36-39）にその概略と展望について述べたことがある。

しかし、主として中央ユーラシアに展開する遊牧世界に関する文献史料は、基本的に言ってその質・量とも定着文明側からの視点から叙述される傾向にあるため、利用

\* 中央大学総合政策学部、国立民族学博物館共同研究員

**Key word :** pastoral nomads, sedentary society, Xinjiang  
 キーワード：遊牧民, 定居社会, 新疆

には十分な注意が必要となる。定着文明社会にくらべて無文字時代が長くつづいた遊牧民の社会が自らの世界を描き出す習慣をあまりもたなかったとしても、それは責められるべきことではない。また、記録が少ないからといって遊牧民社会がとりわけ中央ユーラシアの歴史に果たした役割を過小に評価すべきでないことは言うまでもない。こうした資料の偏向が、近代以降に形成されてきているヨーロッパ中心の歴史観が中央ユーラシア史を世界史の舞台から欠落させてしまう原因になっているのだとすれば、その厚みと存在意義を保証し、世界史上でのその役割の探求、大きくいえば世界史叙述の再構成を試みていくための研究上の努力のひとつがフィールドワークに求められてもしかるべきであると思う。

ところで、歴史諸文献を利用して遊牧社会をみようとする際に、さしあたり上述のような記録者のもつ限界、すなわち定着文明中心の視点からの脱却が求められるという事は、多くの文献史料では定着社会との関連に於て遊牧社会が描かれていることを誤りなく認識しておかなければならないということである。その関連性の叙述にこそ初めからバイアスがかかっていることを見抜いておかなければならないのである。ここにひとつの問題がある。遊牧社会と定着社会の実際の関係をいかなる視点に立って捉えるか、またはいかなる展望をもって語るのかということである。

従来の方の見解に於て我々は遊牧民の定着化を歴史展開のメルクマールのひとつと捉えることにほとんど躊躇を感じて来なかったようである。遊牧民の定着化そのものはあちこちで起こったことであり、また今も進行している事実である。しかしその方向性に普遍性をみいだして、遊牧民が定着化する、そのことがいわゆる文明化であり、歴史の必然的発展であるとみるのならば、それは大いに疑問である。遊牧民はいずれ定着化する運命にあって、遠い将来には遊牧は消滅してしまうだけなのだろうか。そう言うことはたやすいことであったとしても、そのことを歴史と現状にてらして論拠づけられるほど分析が十分になされたとはいい難いのではなからうか。まして、ユーラシアで重大な変容がおりつつある現在、従来の世界の「国家」統治思想、すなわち定居民として牧民を統制するというようなパラダイムに追随するだけの歴史観も見直しが迫られるであろう。今や、控え目に言っても、もうすこしゆるやかな枠組みを設定しておくべきではないだろうか。

さて、遊牧民はけっして行方定めぬ流浪の民ではなく、自ずと「領域」を定めてはじめて集団を成り立たせている人々であることは言うまでもない。ただし、定着「国家」にくらべて、その社会はいささかフレキシビリティに富んでいるということであろう。それを説明するには、年間の生活様式が移動を原則としているということ以

上に、自然状況や経済状況に迫られて移動するときの方法と結果がドラスティックなものとなりやすいことを強調すべきかもしれない。次に農耕社会における人の移動と遊牧社会におけるそれとを比較してみよう。

定着農耕社会も歴史上絶えず流民・難民を生み出し、人は移動する。天災・戦乱に原因する飢饉はしばしば大規模な人の移動を引き起こす。経済統治の失敗や混乱、あるいはその反面でよその地域に相対的に、または絶対的に浮かび上がる経済・軍事上の求心力なども、人と社会に流動性を与える要素である。中国農村社会における「反乱」の歴史や、中央アジアのオアシスの消長の歴史などが、それらの事例を数多く示している。原因はどうかであれ、定着農耕社会におこる人の非日常的な移動に際して、農民は土地というほとんど唯一の生産手段を運ぶわけにはいかない。人ひとりもしくは人の集団が動くのである。それがあつた新しい組織や社会や国家権力を形成する場合もあれば、単なる労働力として吸収されてしまう場合もある。ただし、たとえば中国史における大量の官僚の移動の背景には、所与の官有地や荘園のようなものが横たわっていたし、知識人あるいは無頼のなかには門閥などの食客として移動するような者もいたわけであるし、もちろん商人の活動もあるが、それらはあくまでもそれぞれ定着農耕社会内における日常の移動のひとつにすぎないと考えておく。

それでは遊牧社会における移動はどうだろうか。人の移動は家畜という生産の手段そのものを伴い、いわば社会そのものが移動する。たとえば、文字どおりの遊牧が効率よく運営されることの可能な地域であれば夏の時期、冬営地にほとんど人はいない。冬営地に集団が集中する時期、夏営地は多くの場合人も家畜も棲みえない。そういう自然環境のもとで各季節の営地が設定されるものだからである。これは日常的な、年間を通しての移動である。一方、定着農耕社会におけると同様やはり天災や人災による予期せぬ移動を遊牧集団が強いられる場合がある。その場合、端的に言えば生き残る道は二つしかない。手持ちの家畜集団がどこか別の土地（草原）に移住するか、または牧畜という生業から離脱するかである。この両者の間にはさまざまな形態があつたかも知れない。虹の色分けのごとくに横たわっている。歴史上ときおりみられるような、遊牧社会から発する民族移動ともいえる大規模な移動現象の中でも、その集団がもつ軍事的能力に大きく影響されながらも、遊牧という牧畜規模の縮小（以前よりも狭い牧地の確保しかできなかつた場合）あるいは移牧や舎飼形態への変更（そのみが許される環境の場合）などが起こりうる。究極のところは牧畜そのものの放棄となり、牧民の定住民（都市民・農民）化あるいは既存の都市・農村の従属民化という現象をひきおこす場合もある。こうして、遊牧民集団のそれぞれの時代と地域に応じて、大小さ

さまざまな程度の変容が遊牧民社会のなかで同時に、または時をへだたててみられたはずなのである。もちろんこうした方向とは逆に、遊牧国家・遊牧帝国といわれるような大集団の結集する時期がある（たとえば、より広大な土地＝草原とそこに展開する人と家畜の集団の吸収に成功した場合など）。筆者は、ウイグル民族の果たした歴史的役割とその環境を8世紀からモンゴル帝国期ころまでをおうことによって、遊牧民そして都市・農耕民が織りなしたユーラシア社会の構造をみることができると考えている。

以上、簡単ではあるが、遊牧社会における移動というものを、農耕社会における人の移動と比較して考えてみた。ユーラシア世界の中の、この遊牧と農耕とは互いに乖離して存在するものではなく、主として遊牧民の移動生活・非日常の移動・戦闘略奪活動にもとづく和戦両様の関係で結ばれているものである。遊牧民の側から、この移動の実状・結果をみていくことができれば、遊牧社会と定着農耕社会の関係性を従来以上に整理して、しかも偏向の度合を少なくして考え直す契機となるにちがいない。しかしながら、はじめに述べたように、そのミクロの世界を具象的に表現している記録はそれほど多くはないのである。遊牧社会の日常生活・基本的な生活サイクルから非日常の移動も発している。そうしたミクロなものへの理解は、たとえば「絹馬交易」「茶馬交易」あるいは遊牧民による「略奪」や中国史において見られるような国際関係上の諸関係のようなマクロの関係への理解にもままして深めておくことが必要であろう。こうした遊牧生活の、ミクロではあれすべての基盤である日常は、家畜群を基礎とする生活の形態から言って、たとえばヘロドトスや司馬遷が描いた当時からごく最近に至るまで、それほど劇的な変更はなかったのではないか。そうだとすれば、現在の状況の調査から出発するというのも、作業上ゆるされるだけでなく、必要な方法であろう。歴史上の遊牧生活の形態の変容への理解も、文献資料の解釈も、いくばくか現地調査の材料から暗示をうけることもあるに違いないと期待される。

本稿は、以上のような認識にもとづいて、ユーラシアの遊牧社会のなかでも中国の新疆維吾爾（ウイグル）自治区における筆者の予備的観察を報告し、今後の調査・研究に資そうとするものである。この問題について、今は筆者にとりまとめる時期ではないが、将来のユーラシア文明史叙述のため、現代の世界の「国家」をも透視する視点をもつべきことに、あらかじめ留意しておきたい。

## 2. 新疆における遊牧民の観察例

遊牧民と定居社会との対比に関連して、筆者が観察・調査をおこなった事例の地点と時期は以下のごとくである。

- a. ジャス-カラガイ草原（アルタイ地区）：1989.8.14
- b. アルタイ市近郊の草原（アルタイ地区）：1989.8.14
- c. シェミルシェク村内（アルタイ地区）：1989.8.13
- d. ウルングル湖南辺（アルタイ地区）：1989.8.16
- e. サイラム湖周辺（ボルタラ-モンゴル自治州）：1987.7.11-12
- f. テギルメティ村（キジルスゥ-キルギズ自治州）：1987.10.25-26
- g. 小カラクリ湖近辺（キジルスゥ-キルギズ自治州）：1989.9.14-16

以下には、この a~g の順に観察・調査の内容を紹介していく。

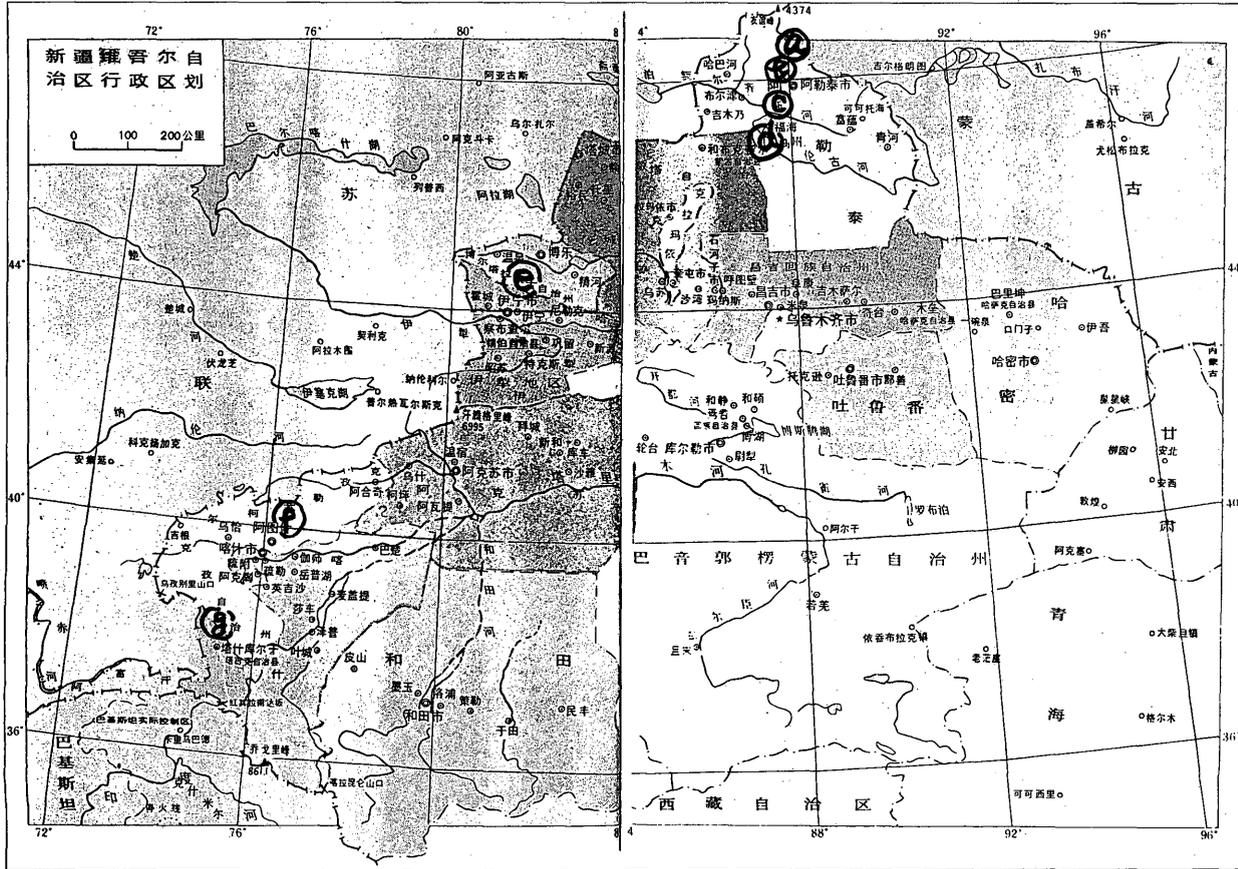
写真 1-18はすべて筆者撮影による。

### 2-a. ジャス-カラガイ草原（アルタイ地区：山岳中）〔地図 2〕

1989年 8月14日

ここはアルタイ（阿勒泰 Altai）地区のカザフ（哈薩克 Qazaq）遊牧民の夏牧場のひとつである。アルタイ市南部から迂回して北方へジープで約3時間、b地点の小規模草原を経て、いくつかの峠を越え山林の中の道をシェミルシェク河を遡るようにしながら国営の砂金採取場などを経由して到着する。推定だが、北緯48度10分、東経88度あたりであろう。アルタイ市から直線距離で約40kmほどであろうか。ジャス-カラガイ（Jas Qarayay）とは「若い松」の意味で、なだらかな斜面には松種の樹木が多い〔写真1〕。点々と帳幕（カザフ語でキギズ-オイ ke(g)yz öy すなわち「フェルトの家」）が設営されているが、斜面に盛土をして水平の円形の間としている。この場が、移動したあとにはユルト／ジュルト（jurt）ということになり、毎年のように帳幕設営場所となる。一隅に牧業管理所の建造物があるが、ここにいるのは典型的な移動遊牧民といってよい。ただしこの牧草地の一角には、丸太を井桁状に組み上げた墓の群があり、移動して来て利用する牧民集団は決して無秩序ではなく、一定の集団であることが一見して理解される。

この一帯のカザフ遊牧民は冬には、同じアルタイ地区といってもはるか200km南の、d地点（ウルングル湖近辺）くらいまで南下して越冬する。場所の確認はできな



地图1 新疆维吾尔自治区行政区划と調査観察地点(新疆维吾尔自治区测绘局 1985)



写真1 ジャス-カラガイ草原（アルタイ地区）

かったが秋営地も決まっているとのことであった。移動に使用するラクダは、この時期ほとんど放し飼いの状態であった。

夏の昼間、馬群と羊群は男たちに連れられてさらに山地の奥に展開して姿は見えない。帳幕とその周辺には女と子供が残って若干の牛の世話と家内労働にいそしんでいる。女は刺繍や裁縫、洗濯などの家事労働そしてチーズ（*irimsik*）・バター（*sare may*）などの乳製品の製造などに休む暇はない。折しも、牛に食われないように細い糸で網をかけるようにして木柵をつくり、芦ゴザのようなものを広げた上にチーズの塊を並べていた。天日で乾燥させて作る冬の保存用チーズである。かなり塩をきかせてある。

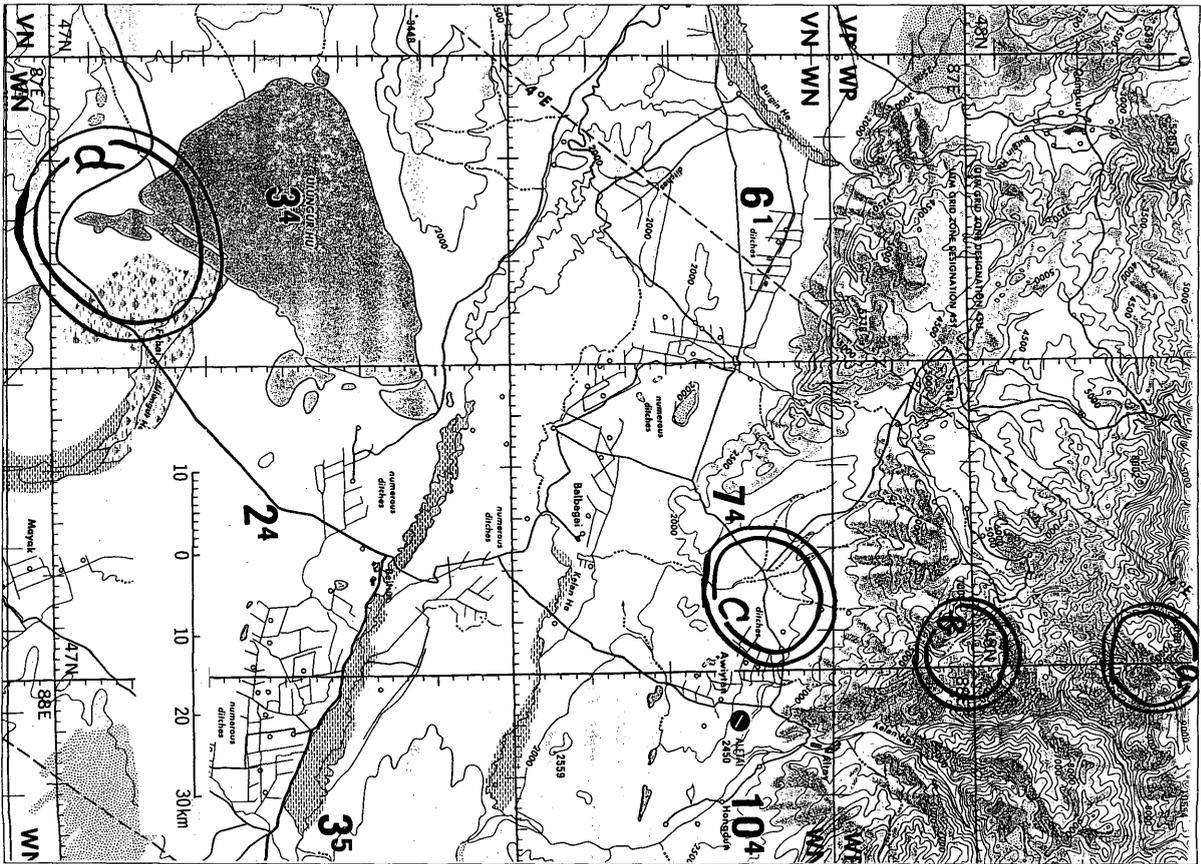
水は斜面から湧き出る清烈な泉が利用されている。

このジャス-カラガイ草原には農耕の片鱗すら見あたらない。主食のひとつとしているナン（*nan, bölke*）の原料である小麦粉や、遊牧民に欠かすことのできない茶（磚茶）や、家財道具の一部（金属製品たとえばストーブ・器・盆や陶器類そしてラジオ等）は当然都会や農村との取引で入手するものである。

## 2-b. アルタイ市近郊の草原（アルタイ地区：山中の小平原）[地図2]

1989年8月14日

上述のジャス-カラガイ草原へ到達する道筋の、アルタイ市にごく近い草原。ここには牛を中心とした家畜群を、都市の住民から預かるような形式で放牧する牧畜家族がいる。煉瓦づくりの小屋に定居し、冬も移動しない。冬のために草を刈り、干し草



地図2 a, b, c, d 地点 (アルタイ地区部分) 1:500,000 (TPC F-7A)

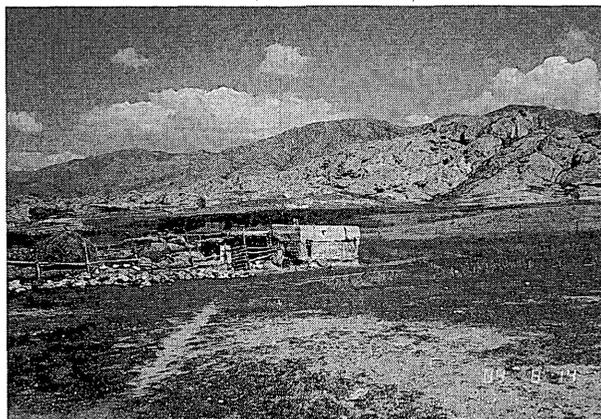


写真2 定着牧民の家畜囲い（アルタイ地区アルタイ市近郊）

の大きな堆積をきずいている [写真2]。草原には鉄条網による柵が広くめぐらされている。家族は80才になる老人とその夫人および息子一家だけのようであった。草原から少し離れた山側に、数件の小規模農家が眼にはいったが、カザフ族ではないようだった。低い山並に囲まれたようなこの草原は、冬には雪のために町からの車による人の往来は断絶するが、牧民一家は馬とソリによって町にでかけて必要な物資を補給する。町の人から預かった乳牛の出す乳を売却した収入は、その一部が牧民のものとなる。一頭の牛は一日に 10 kg ほどの乳を出し、それは 8 円で売れる。乳の季節にかぎっていえば、都市の賃金労働者の収入をはるかにうまわる。年間にならして考えても、現金収入はかなりのものと推定される。質素な生活ぶりからしても預金はかなりたまるそうで、このカザフ老人は、カザフスタンに住む親戚を訪問するのを楽しみにしているとのこと。草刈り仕事のためのトラクター購入の費用も用意できつつある。

要するに、牧畜地域の中の都市アルタイも、こうした草原に取り囲まれているわけであり、都市住民や定着農耕地の人々に乳製品・食肉を供給して生計をたてる牧民も存在するのである。アルタイ市に住むカザフの人々も、草原と牧畜の生活に潤いを見だし、単なる都市化には必ずしも同意しない伝統的精神を保持しているように思われた。

この草原の牧畜業は定居牧畜である。ただし舎飼いはおこなっていない。

2-c. シェミルシェク村 (アルタイ地区：山裾) [地図 2]

1989年 8月13日

シェミルシェク (切木穿切克 *sämirsäk*) は、アルタイ市からみると北方にあたる a, b の地点とは別方向の、西南方面に位置する村である。小規模ながらいくつかの集落を点々と形成しており、小麦などの畑も持ち、人工の水庫も築造している。その一方で牛・羊・山羊の群を保有し草地を擁している。家畜囲いの柵もみられ、小屋の屋根に干し草を積み上げた風景によく出会う [写真 3]。この住民もカザフであり、いつのころからか定居・農耕化をすすめているのだろう。それがそれほど遠いことで



写真 3 家と家畜囲い (アルタイ地区シェミルシェク村)

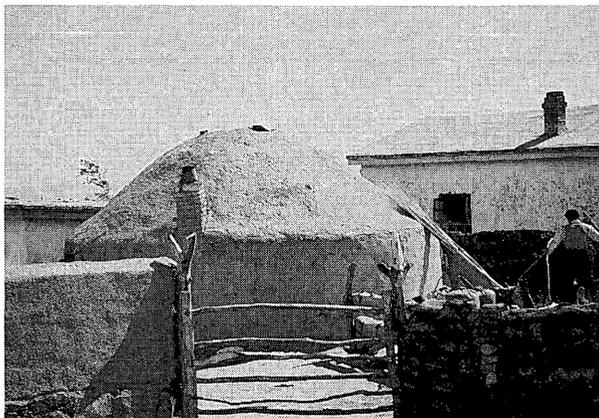


写真 4 キギズ-オイ型の土造家屋 (アルタイ地区シェミルシェク村)

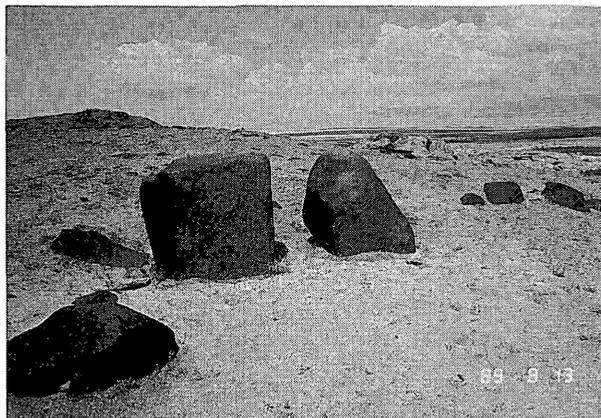


写真5 環石墓と男女一對の「石人」。男は弓を持つ。(アルタイ地区ジェミルシェク村)

はないだろうことは、水庫も比較的新しいこと、建築中の土つくりの家には、まったくキギズーオイ（帳幕）形のものも見られる〔写真4〕ことなどから想像がつく。b地点の例も草原・平原の規模が大きければ家畜群も大きくなり、また何よりも定着農業が可能となれば、少し時間が経過するとこのような集落形成にいたるものかとも想像される。ただ、自然条件が合わなければそれまでである。ここは、いわば定居化過程にある牧民地区とみられるが、詳しいことは未調査である。

この村は、アルタイ山脈の西南の山裾で、南に広大なジュンガル盆地がひろがろうとするあたりに位置する。aの夏营地とdの冬营地とを結ぶような地点にある。かなり見通しのきくこの村付近一帯には、各種各様の「石人」や「環石墓」群など、遊牧民の歴史的遺構が点在している〔写真5・6〕。

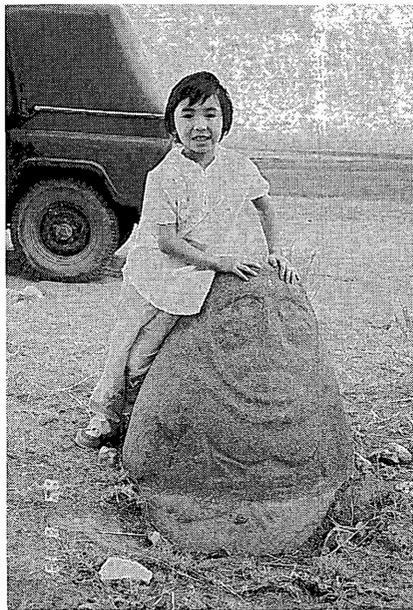


写真6 短剣を持つ「石人」とカザフ族の少女（アルタイ地区ジェミルシェク村）

2-d. ウルングル湖南辺（アルタイ地区：ジュンガル盆地）〔地図2〕

1989年8月16日

ここはジュンガル盆地の北端にあたり、アルタイ山脈南端付近から発したウルングル（烏倫古 Ulungur）河の水が滞溜するところである。福海県の周辺地域である。大小の湖沼も散在する。ウルングル河の北側 50～70 km あたりにはほぼ平行してイルティシュ河〔写真7〕がアルタイ山脈からの多くの支流を集めながら西北西へ流れている。このイルティシュ河流域の段丘とウルングル湖周辺は、ところによって豊かな農業地帯ともなっているが、古来、遊牧民の営地として名高いところでもある。現在

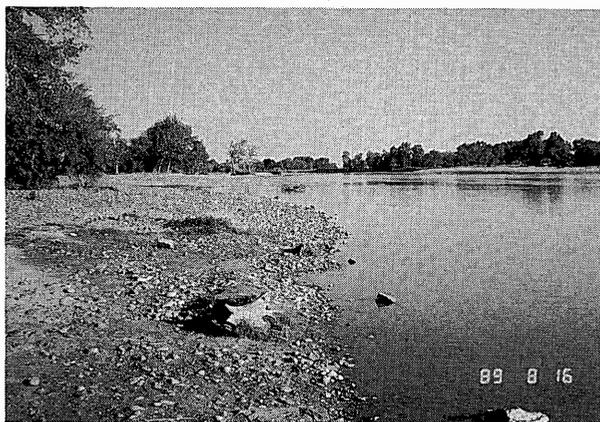


写真7 北屯付近のイルティシュ河。下流方向（アルタイ地区北屯村）



写真8 冬営地に夏も設営されているキギズ-オイ（アルタイ地区ウルングル湖南辺）

でもアルタイ山中に夏营地をもつ遊牧カザフの冬营地として使用されている。またモンゴル遊牧民も数多くはないが存在しているため、オボを散見することができる。現在、すべての遊牧民が一樣に年間移動生活をしているのではないことは、上に見てきたとおりであるが、ウルングル湖南辺にも規模はちいさいが馬群・羊群・牛群などを夏期に見ることができた。ただし、帳幕はごく稀にしかみられなかった〔写真8〕。

聞くところによれば、冬期には家畜群をひきいるカザフ遊牧民の集団が広く散開する冬营地になるということである。

## 2-e. サイラム湖周辺（ボルタラ-モンゴル自治州：山岳上の湖）

〔地図3〕1987年7月11-12日

カザフ、キルギズ、モンゴル各族の遊牧民の夏营地として著名である。東経81度10分、北緯44度35分がほぼ湖の中心点。周辺には烏孫時代のもとのとされる墓のマウンドが散在する。今や観光拠点としての建造物が湖の南畔（伊寧市に続く果子溝の側）に建設されるにまで至っているが、この水と湖周辺の傾斜のある草原一帯は遊牧民にとっての至福の夏を保証している。すぐ周囲の山々には万年雪が輝いている〔写真9〕。

遊牧民の夏の祭、モンゴルでいうところのナーダムでは、アフガニスタンでいうところのブズカンスなわち騎馬の2隊が羊1頭を奪い合うゲームが行われる。その予選が牧民の間で行われていた。カザフ遊牧民の家族も湖をわたってくる冷涼な風に身をまかせながら草原でくつろいでいる。

7月中旬ころまでに、サイラム湖めざして羊群を追って果子溝を牧民が登って来る〔写真10〕。羊群を先導するのは必ず数頭の山羊である。分解したキギズ-オイ（帳幕）や大きな家財道具を満載したトラクターやトラックの姿も目だつ。交通事故に遭った羊の賠償をめぐる悶着も起こる。

こうした山岳上の夏营地では、観光客などが見渡せる湖周辺のみならず家畜と牧民集団が展開するのではなく、夏の日常としては、周辺に広くまた複雑に入り組んだ山間部にそれぞれ一定の集団が陣取る〔写真11〕のであり、湖のはるか対岸の稜線上に騎馬牧民の姿を望むこともできる。湖のごく周辺地域はナーダムやその際のバザール会場つまり交易会場ないし大規模な水場としての役割をはたしているかのようであった。



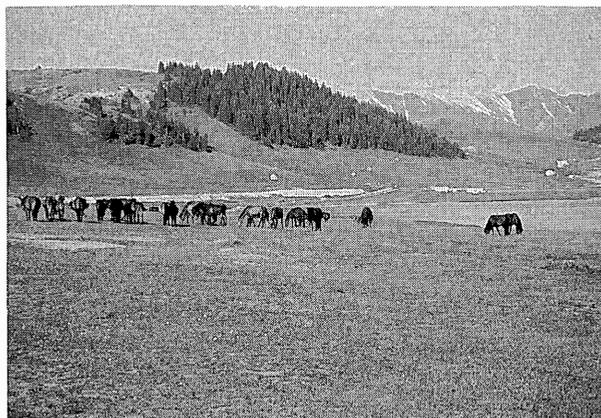


写真9 サイラム湖畔の馬群 (ボルタラーモンゴル自治州サイラム湖)

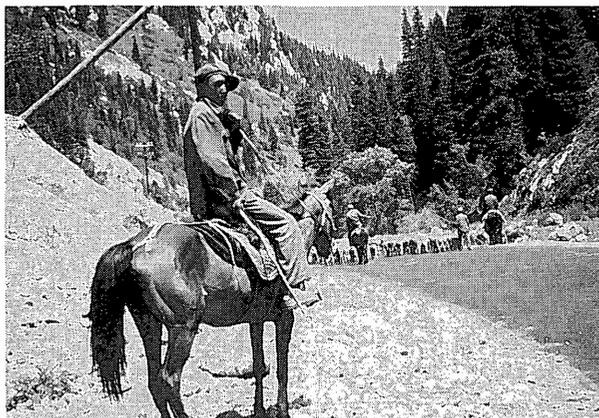


写真10 果子溝をサイラム湖へ登る家畜群 (イリ地区)

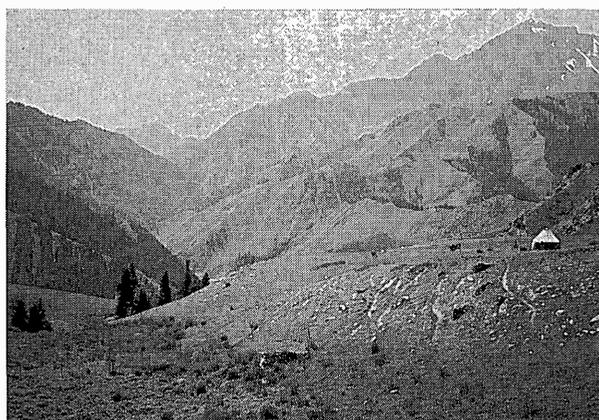


写真11 サイラム湖南の山岳草原 (イリ地区)

## 2-f. テギルメティ村（キジルスウーキルギズ自治州：平原のはずれ）

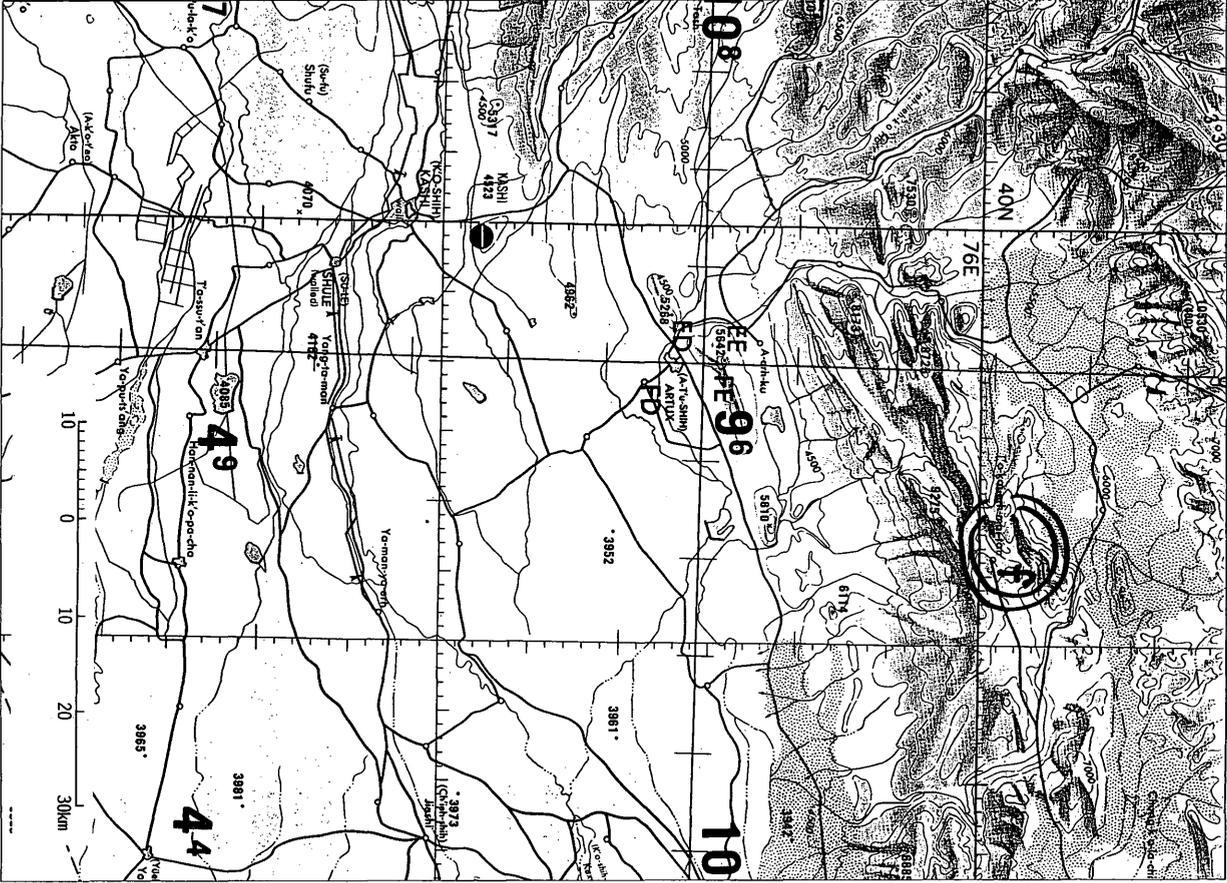
〔地図4〕1987年10月25-26日

天山山脈の南麓とパミール高原に区切られ、カシュガルの農村・都市群を北、西、南から取り囲むようにして位置するキジルスウーキルギズ（克孜勒蘇柯爾克孜 Qizilsu Qirqiz）自治州の州都は、カシュガルの東北約 30 km あたりのアルトゥシュ（阿图什 Artis）である。この町から北へ天山山脈方面へ上り詰めれば、そこは国境地帯でありキルギズの遊牧領域のひとつとなっている。

その一画にテギルメティ村（吐古買提 Tägirmäti）がある。町から直線的にはほぼ東北へ 40 km ほどであり、そこから国境までの直線距離もほぼ 40 km である。A. Stein によると東経76度24分、北緯39度57分にある Tigharmate 村と表される（Stein 1921: Sheet 6）。ここはスタインが通過した20世紀初頭にすでに村落が形成されていたことになる。アフ（阿湖）オアシス地区経由で、アルトゥシュの北側をほぼ東西にはしる一脈の山塊を迂回して、河川によって途絶えがちな道を進みいくつかのワディを越えながら〔写真12〕、やがて沙漠に近い草のまばらな平原に出る〔写真13〕。町から車で約2時間。もう少し大廻りに迂回する近代的道路も開通している。この平原の南端の裾に東西にのびる山塊があり、その北麓を東から西方面へ、広いところで 150 m ほどの河川敷をもつ流れがある。このごく浅い谷に沿うようにしてテギルメティ村が形成されているのである〔写真14〕。上流から水路をひいて水車小屋も造られている。水車は縦軸、横廻りである。この一帯のいくつかの水流が合流してアルトゥシュのオアシスの西側と南側を区切るように潤していく河川となる。

現在（1987年10月の聞き取り）の登録人口は5247人。そのうち約500戸3700人が専業農家である。とある家に一泊する。細長い村の東のはずれ、少し向こうは草原である。家の概略は下図のとおり。

ごくありふれた農家のようなが、実はこの内庭にキルギズのタムガを大きくアップリケしたキギズオイ（帳幕）を筆者と堀直氏およびアルトゥシュ外事弁公室員ら突然の訪問者のために急遽設営して宿泊所としてくれたのであった。つまり、この一家は牧民でもあって、こうしたキギズオイを持っているのである。そしてこの家は越冬のためのものであり、春に小麦・トウモロコシを植えたあと、家族のほとんどが夏の間は約 40 km 北方の山間部すなわち国境地帯まで放牧に出る。秋にもどってくると畑には実りがある。ちょうど収穫したトウモロコシ粒を干しているところであった。これを碾いてトウモロコシのパン（ザグラ）にする。小麦粉からは、ナン、カッターマ



地図4 f地点(テギルメティ村) 1:500,000 (TPC G-7A)



写真12 アルトゥッシュの町からテギルメティ村へワディを伝いながら戻るキルギズ族の家族  
(キジルスゥーキルギズ自治州アルトゥッシュ市北方)

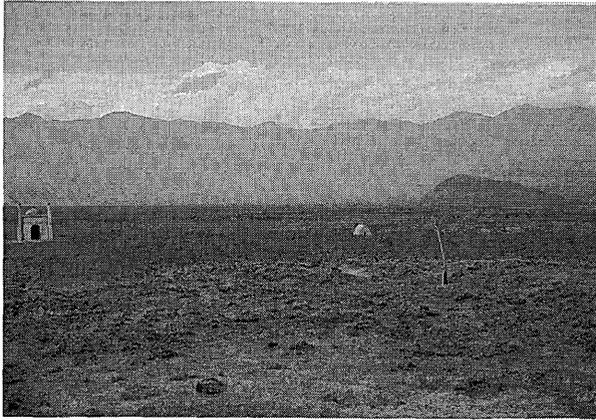


写真13 テギルメティ村北方に広がる荒野



写真14 浅い河谷に沿うテギルメティ村

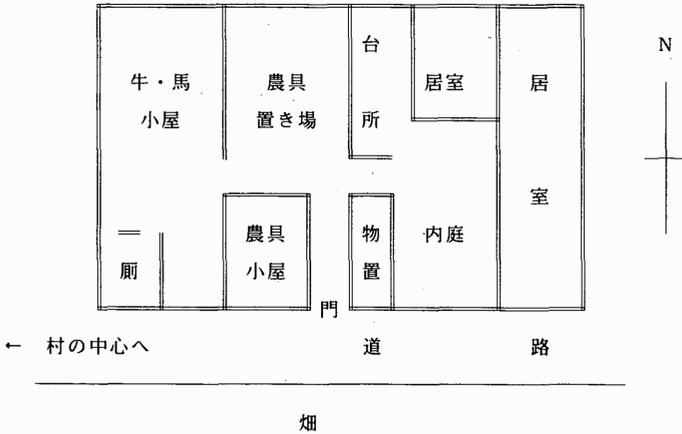


図1 ある農家(牧民)の見取図(キジルスッ=キルギズ自治州アルトゥッシュ市テギルメティ村の東端付近)

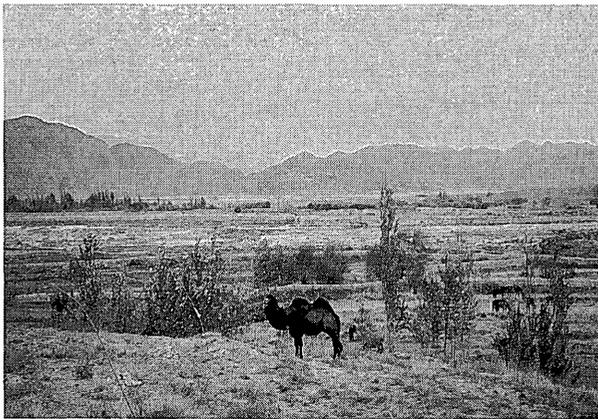


写真15 テギルメティ村の遠景と畑

(厚いナンの揚げ物), ボウルサク(ナンの小切れの揚げ物)などをつくる。茶(磚茶)が何よりの冬の飲物である。夏にしか新鮮なミルクは出ない。冬はミルクを煮てチーズ風味とし, ナンをちぎり入れたジュッカがおいしい。この10月末に家畜は山を下りてきているが, 村からはかなり離れたところで越冬させるという。若者は家畜と共に冬も過ごす。村の中に家畜群の姿は少ない[写真15]。すでにほとんど冬支度である。

家族は Matan Mamet Tursun (57歳)とその夫人(45歳), 2男3女, 孫は合計16人。未婚の次男は同居らしいが, 正確な同居者の数は聞かなかった。ただし男たちは

家畜群とともに郊外にいるようであった。

この家族の所有する家畜は、羊260頭・ヤギ100頭・ラクダ6頭・馬4頭・牛6頭であり、牛と馬の一部は家の家畜小屋に舎飼いされていて役畜・乗用馬となっている。この村の中での乗り物は馬とラクダである。村政府所有のトラックが1台あってアルトゥシュ町との間を結んでいる。

半定着、半農半牧ということばはこうした実態を示すものであるようだ。

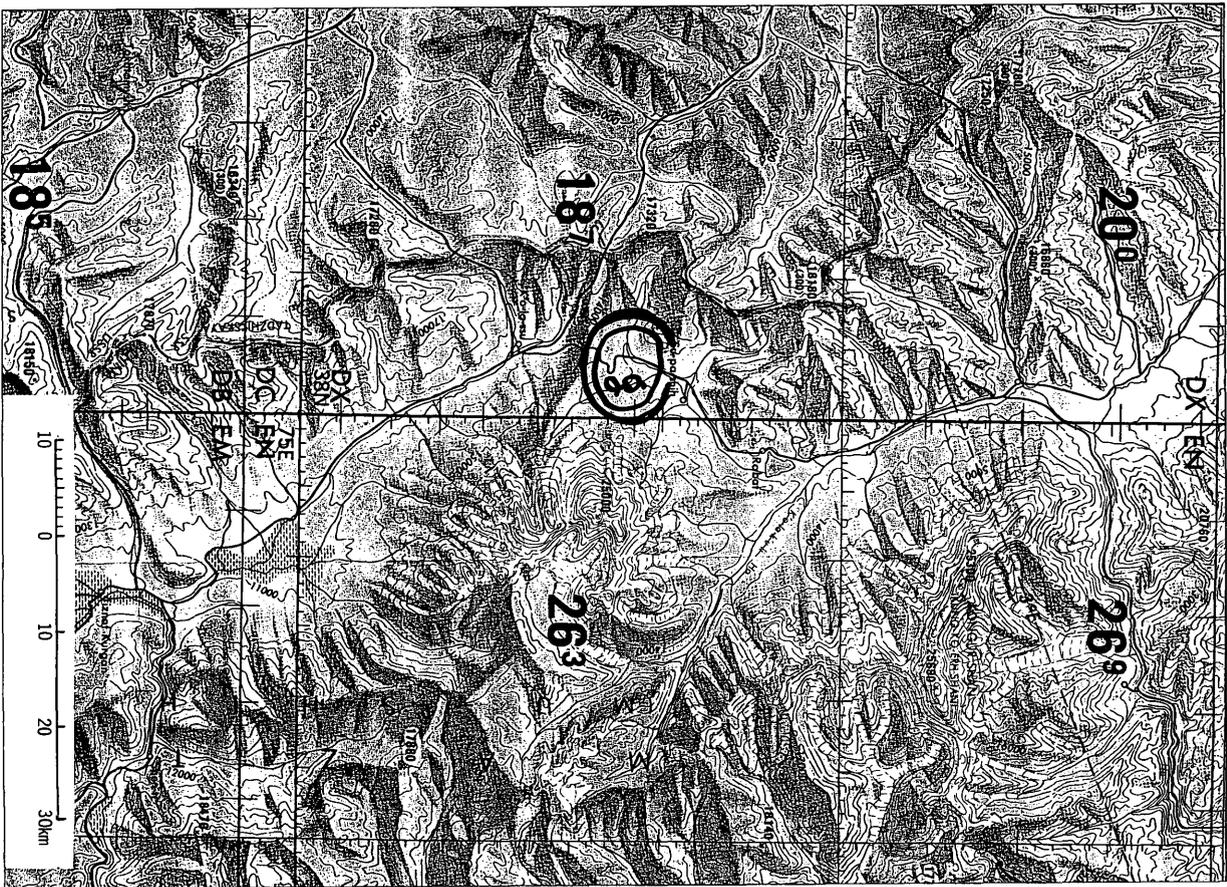
## 2-g. 小カラクリ湖近辺（キジルスゥーキルギズ自治州：ムズターグーアタ峰周辺）[地図5] 1989年9月14-16日

北緯38度20分、東経75度の辺りのアラル（Aral）地区を秋营地（qizdiq）とし、その東北約20kmの辺りに冬营地（qištiq）をもつ集団をたずねた。

カシュガルからパキスタン国境へ向かう道路（中巴公路）をひた走り、霊峰コングル山（7,719m）と独立峰ムズターグーアタ（7,546m）のそびえるあたり、標高3,500m前後の細長い平原一帯がキルギズの遊牧地であり、これらの山麓に四季の移動をくりかえす集団がかなり存在している[写真16-18]。このムズターグーアタ西麓と特にコングル山東谷のキルギズ遊牧民については、1981年の新聞記者による記録（藤木：1982）が参考になる。

南は行政的にはカシュガル地区に属するタジク自治県に接していてタジク族遊牧民の世界となるが、このあたりはキルギズのみである。彼らキルギズの言い分では、1940年代の三区革命のころ、イリ渓谷にキルギズが土地を確保する計画があったが、結局そちらはカザフにとられ、またこちらではかなりタジクに土地をとられた結果が現在のキジルスゥーキルギズ自治州なのだということになる。

さて1989年9月16日、標高3,450mのキャンプ地では、日中は暖かいものの朝の気温はすでに零度をはるかに下回っており、草原のまん中の小さな水流も凍っている。キギズ-オイの中は夜間もストーブの残り火と布団だけでかなりすごしやすいが、明け方には冷気を感じる。この遊牧集団は、この秋营地を2日後にはひきはらい、約20km北方にある標高約3,400mの、「小カラクリ（Qaraqul）湖」へ移動することを決定した。この秋营地には8月30日に入ったので1ヶ月もないことになる。この集団は100家族くらいから構成されていて、夏の間はムズターグーアタの斜面周辺に登っていたという。秋の営地にヤギと羊の群が見えないが、これは夏营地（jaztiq）のホシューコルチェ（Hoš Qorče）から直接冬营地（kištiq）に30~40kmを移動の途中であるという。この集団の冬营地となる小カラクリ湖の南側の比較的広い土地には石積



地図5 g地点(ムズターグ-アタとアラル秋営地) 1:500,000 (TPC G-7A)

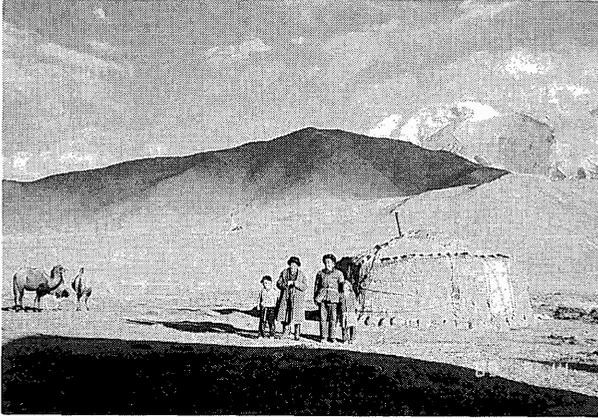


写真16 キルギズ遊牧民のキギズ-オイ（ムズターグ-アタの西麓，アラルの秋営地）

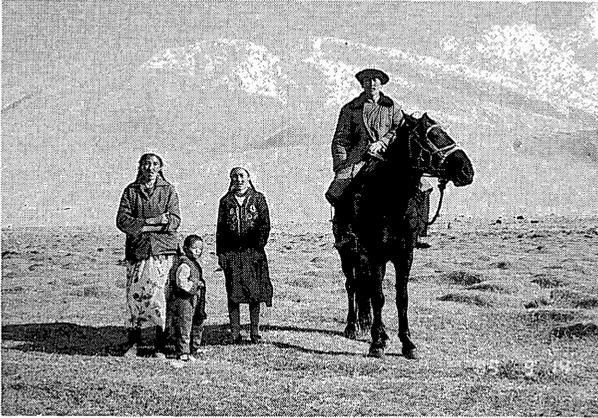


写真17 ムズターグ-アタとキルギズ遊牧民（アラルの秋営地）

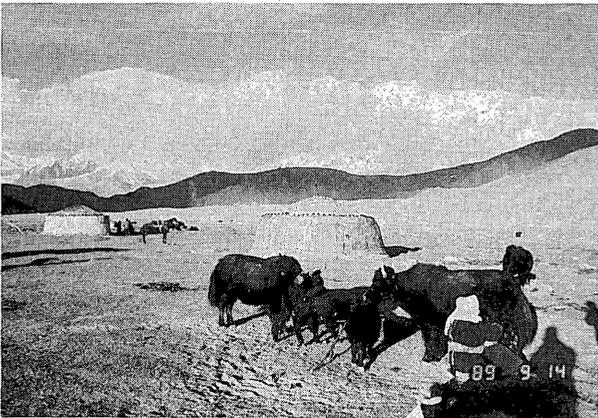


写真18 ヤクの搾乳（アラルの秋営地からコングル山方面を望む）

みの小屋 (Aq Tam) がかなりの数築造されていて、翌年の6月半ばまで逗留するという。かつての日干しレンガの小屋より風と寒さをしのぎやすくなったという話であった。まだ日干しレンガの小屋は残っている。この長い冬を利用して、100~200人の子供のために学校が開設される。相当にこの定居時期は長い。

2つの家族を紹介する。

- A. 家族構成：夫 Tajquran (42歳), 妻 Naqlay (35歳), 長男 Tursunbay (17歳), 長女 Ğulqair (13歳), 次男 Murahmat (8歳), 三男 Qojaqmat (3歳)

所有家畜：羊・ヤギ100頭, 牛(ヤク) 15頭, 馬3頭, ラクダ3頭, ロバ1頭。

この家畜のうち、羊とヤギは1頭につき1元を支払って人に預けて放牧させているという。主人のTajquranが腰を痛めて十分な労働ができないためという。当面家畜を売ってでも治療費をつくりたいとの思いと、我々の食糧調達意志とが合致し、1歳のヤクを400円で買い取る。トラック一台が古いとはいえ1100元というから、この我々の買物はかなり高かったのかもしれない。人助けでもあり、また思わぬ美味を買ったと思えば安いもの。だが、この年の羊の売値は昨年にくらべて50元も安くて150元ないし250元というから、案外リーズナブルであったかもしれない。羊などの家畜は、商人が買付けにやってくるものである。妻の兄は医師だということ。

- B. 家族構成：夫 Abdulla Amit (48歳), 妻 Kongru (45歳), 長女 Irane Qan (27歳, 3男3女をもつ), 長男 Päiz (24歳, 1女をもつ), 次男 Siyin (18歳), 三男 Mähämä (14歳), 四男 Ğoja (12歳), 五男 Mälik (7歳), 六男 Abdurahim (6歳)

夫の父母はすでに死去しているが、父親の牧地は、このアラル地区から馬で1日行程のトルバシュ (Törbaş) という地区にあった。夫には兄と弟そして妹が一人ずついて、いずれもこの同じ集団に所属している。

所有家畜：羊・ヤギ100頭, ヤク10頭, 馬5頭, 犬1頭, ロバ1頭のみでラクダはいない。

今年の草の状態はよく、家畜(ヤク)の乳の出もよいという。

この集団は、基本的には血縁集団から成っているようであったが、遊牧生活には伝統的なもの以外に最近の各種文化の影響があると思われた。なによりも中巴公路のす

ぐ近くを遊牧しているため最近ではとくに外国人の眼にもつきやすい。また小カラクリ湖やアラル地区の草原から西側の禿山を、標高差にして約 1,000 m も登れば、暫定の旧ソ連国境地帯であるため、政府による監視の目も感じられた。さらには、冬の特別の気象変化さえなければ、そして遊牧経済さえ順調であるならば、所有のトラックで1日かけて南のタシュクルガンや、はるか北のカシュガルの町にまで、またそこに至るウパールなどいくつかのオアシスにまで出かけることが可能である。

しかし遊牧生活の基本を変えるような状況にまでは至っていない。かれらの夢は自分でカシュガルの町のバザールへ出かけることなのであった。まだ誰もが自由にこの生活圏外を訪れうるわけではないのである。

また、かれらはロバを所有していることをいささか恥じている様子であった。話の端々に、遊牧領域が狭められてしまったことへの不満がうかがわれるのだが、定着化政策と共に都市・農村の文化の影響が入るにつれてロバなども導入されたのではないだろうか。

### 3. むすびにかえて

今回の観察範囲にかぎって言えば、遊牧民の帳幕の中に、農村・都市の文化のみえない帳幕はない。必ず木綿や錦の布団がある。必ず、ここが中国であることをあらためて知らされるようなデザインの瑠璃の容器がいくつもあって乳製品などを保存している。ラジオを持つ帳幕も少なくないし、ガラスをはめた額や写真立てを飾る家も多い。鉄製のストーブと煙突、ナン焼き用の鍋や大鍋類のない家はない。磚茶を欠かした家も珍しいのではないか。小麦の粉食もごくふつうのことである。これらは一見すると本来遊牧の自然生活の中では生産されないものばかりであるかのようである。木綿製品や小麦、ガラスや近代的工業産品はそのとおりであろう。しかし、考えてみれば製鉄技術や、茶葉でなくても似たような植物の摂取なども、本来かならずしも定着社会から一方的に導入されたものでもなさそうである。前者については、むしろ鉱産資源の現場を保有する人々によって開発されたに違いない。かれらの本来の生業は遊牧であったかもしれないし、かなり定着生活に近いものであったかもしれない。また農業生産物にしても、遊牧民側がむしろ積極的に自らの生活圏の中に農地や農民を取り込んだという匈奴以来の歴史事実を忘れてはなるまい（林 1983: 3-32）。要するにこうした物がいつの頃から、どこから導入されたかは、ものによって、また地域によって大きく異なるし、今の我々が認識している遊牧民の長い歴史を振り返る契機を与

えてくれることでもある。

農村生産物と無関係の「いはゆる純粹の遊牧民は存在しえない」、「彼らの生活状態が定住生活の諸契機を包攝してゐる」と松田壽男が啓蒙的書物の中で述べた（松田 1937: 36）ことにあらためて注意すべきであろう。これは真実をついた見解であろうと思う。もっとも、このことばは、遊牧経済は農業経済にかぎりなく近づかざるを得ない運命にある、という文脈の中で語られたことであり、その文脈自体は最初に述べたとおりさらに検討すべきことである。ただ、上の引用句に示された遊牧民の定義を忘れてはならないと考えるものである。遊牧民の生活をあまりに単純化してはならないようである。

そうであれば、今回の観察の記録は断片的なものにすぎないとはいっても、それぞれの事例の中に見え隠れする都市・定着農耕文化の要素は、実は遊牧社会にとっては欠くことのできない存立要素ということになる。けっしてごく最近の事情からもたらされただけの現象ではないのだから。遊牧民の歴史の表象であると考えべきである。

現在、遊牧民はたえず都市・農村と商取引をおこなって生活必需品を入手する。牧地には行商人や公の買付け人などがやってくる。牧民はそこで羊などの家畜だけでなく、家畜の皮革や毛皮、自家製のフェルト（共同作業）、女たちのつくるフェルト製のバッグや刺繍製品、敷物などを売る。一方、都市・農村のバザールにそうした牧地での産品を売りにでかける牧民をみることももちろんできる。

このような両社会の関係を観察するにつけ、この関係はけっして近代以降や最近の傾向に限らないことを想定せざるをえないのである。われわれが立ち入ることのできる地域は、町やオアシスからの交通手段のあるところに限られてはいるものの、遊牧民の交通路や移動経路がわれわれの想像をはるかにこえた遠隔の山間部にまで入り込んでいる事実からすれば、遊牧民の側から町やオアシスにアクセスすることは、必要があれば間違いなく可能である。まさしく遊牧民側からの視点が必要とされる所以である。歴史における遊牧社会の能動性を再認識しておきたい。

現実にたちもどれば、今回観察した人々はみな中国に属する。いまユーラシアは大きく動いている。はたして中国の、相対的に豊かな物質文化はその動きに対応していくことができるであろうか。中国の「社会主義」のもとにおける「資本主義」経済の沿岸部における発展は、必然的に中国にとっての内陸経済の発展への展望を要請する。そうでなければ現在の中国国家は立ちゆかなくなるからである。そしてこのことは、ユーラシアにとっての内陸部すなわち中央ユーラシアの将来を見ようとするとき、大きな影響要素となることは確かなことである。

本稿は、1989年段階までの観察・調査にもとづいて、1994年度までの共同研究の初期の報告として執筆したものであり、変化の速い中国の事情からすれば「時代遅れ」の部分もあるかもしれない。しかし、当時の観察記録としての意味を維持するため、あえて加筆訂正などはおこなわなかった。

## 文 献

- 藤木高嶺  
1982 『秘境のキルギス』朝日新聞社。
- 林 俊雄  
1983 「匈奴における農耕と定着集落」護 雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』pp. 3-32, 山川出版社。
- 松田壽男  
1937 『乾燥アジア文化史論——支那を越えて——』四海書房（小林 元と共著）。
- Stein, A.  
1921 Map of Portions of Chinese Turkistan and Kansu. *Serindia*, Vol. V, Maps.  
TPC F-6B  
1989 *Tactical Pilotage Chart, F-6B*. 3rd ed., Compiled March 1989.
- TPC F-7A  
1989 *Tactical Pilotage Chart, F-7A*. 1st ed., Compiled August 1989.
- TPC G-7A  
1974 *Tactical Pilotage Chart, G-7A*. 4th ed., Compiled March 1974, Revised December 1984.
- 梅村 坦  
1985 「遊牧-農耕関連論序説——ユーラシア地域を中心として——」『ユーラシア社会史における遊牧・農耕及び通商に関する基礎的研究』（昭和57・58・59年度科学研究費補助金（一般研究 A）研究成果報告書）pp. 5-11, 東洋文庫。  
1986 「中央ユーラシア社会史研究の展望——現地出土文書・隣接諸分野をめぐる覚え書き——」『学術月報』39(9), 36-39。
- 新疆維吾爾自治区測繪局  
1985 『新疆維吾爾自治区交通図冊』測繪出版社。